

不本意入学感・準拠集団・人格適応の 三者関連に対する社会心理学的接近¹

Dissatisfactory Entrance into University, Reference Groups
and Personal Adjustment : A Socialpsychological Approach

豊 嶋 秋 彦²

(1987. 3. 31 受理)

I 問 題

II 方 法

III 総括的適応感と不本意感・準拠集団の関連性—統計的分析—

IV 不本意感—人格非適応感の変容過程の事例研究

V 不本意感—人格非適応感の〈形成—解消〉発生パターン

(1) パターンA 自我中核的準拠体制の変更による解消

(2) パターンB 抑制されていた学業興味—適性志向の展開通路の発見による解消

(3) パターンC 展開困難と認知した目標活動の達成を支える準拠集団や実現水路の発見による解消

(4) パターンDのために—職業展望をめぐって

VI 総括と展望

1. 本研究の III・IV 章は、第24回・第25回の東北地方大学保健管理研究会（1985，1986），第24回全国大学保健管理研究会で逐次発表した報告の総括であり，V 章の概略は第28回日本社会心理学会（1987）で発表される。

また、本研究に使用した統計データと調査面接事例研究とは昭和59～61年度文部省科学研究費により補助された研究プロジェクト「大学生における適応の構造と適応過程の予測因に関する追跡的研究」（59510040）に負う。研究分担者の弘前大学教養部・芳野晴男教授，同教育学部・清 俊夫助教授，東北大学医学部・細川徹講師の諸先生に感謝申し上げたい。

2. 弘前大学保健管理センター

I 問題

学生相談や大学精神衛生活動は単に学生の精神疾患に対処する活動ではなく、それを超えて、学生の成長・発達を援助する活動として規定できる(末廣 1986)。もちろん発達とはしばしば誤解されるような心身状態や構造の時系列変容ではなく、主体が適応を迫られる社会-文化的にモデルな又はノルムとしての価値、場面的あるいは年齢相応的な下位社会-文化の価値、そして、課題や困難に逢着した主体を第三者として評価し裁定する「思考の文化」の判断基準など、に対する社会-文化適応であり社会化である。それゆえ発達援助の本質は加齢や生活場面の変容につれて主体が次々にであって行く諸々の社会-文化との間の社会-文化適応と人格適応の双方を援助することだと言えよう。つまり、発達援助である限り、ミクロな適応の援助、例えば、自我と「非」自我の間の適応関係や自己と経験の間の適応関係の援助に専念することはやめざるを得まい。

他方、学生相談や精神衛生活動、ひいては心理臨床が学を指向する限りにおいては、個別事例への密着によって見失なわれがちな「個別性・事例性の問題に共通する一般性の解明」(西園 1986)、「学」としての普遍化」(児玉 1986)が求められる。勿論、一般性の解明や普遍化は無媒介には不可能であって、普遍性と個別性を媒介する類型の提出が要求される。とりわけ、問題や非適応の発生構造の類型を見出すことによって、問題・非適応を克服する方向性が明らかになる。

かくて要請されるのは事例における主体と環境あるいは関連事態の間の適応-非適応の発生類型を提出することである。かかる試みは既に安倍淳吉を指導者とする中間接近的 medium approach 立場の社会心理学に拠る研究者によって既になされており(安倍 1969, 清 1974 など)、さらに、類型構成論からする再検討も加えられつつある(菊池 1984)。これらはすべて人の社会・文化に対する非適応、即ち社会(文化)非適応の発生類型に限定されてはいるが、そこでは主体が自我中核的に準拠している集団とそこに通底している価値体制、および当該の準拠集団による自我支持とが鍵概念になる¹⁾。その逆方向の適応-非適応、即ち、社会・集団・文化の人格(非)適応については、準拠集団のあり様によって整除した発生類型は未だ提出されてはいないものの、学生が入学前に準拠していた高校期の進学進路水路の構造が重要であり入学後の人格非適応もそれとの関連で生じてくるとの示唆は既に細江(1974, 1975)によってなされている。また、峰松(1986)は精神分裂病学生の大学復帰にさいして保健センターに設定されたサロン「サイコ・リトリート」で集団を形成させ、相互に準拠集団となりあうことが彼等の適応に好影響を与える事を指摘している。そして我々が弘前大学生に実施した追跡的質問紙調査によれば、1年次時点の人格非適応感²⁾は自我中核的準拠集団をもたぬ層や、それを高校期の友人にする層で強く、逆に、大学内の仲間集団に自我中核的な準拠をみせる層は良好な人格適応感をえやすいのである(豊嶋ほか 1984)。これらから大学生の人格(非)適応の発生にとって準拠集団や、準拠する価値が何であるか、が鍵のひとつであると示唆される。

一方、我々が上述の対象者を4年次時点まで追跡調査した結果、人格(非)適応感²⁾はつねにその時点における大学・学部・学科(課程・専攻)への(不)満足感、即ち、所属(不)本意感と有意

に関連することが知られた(豊嶋 1983, 豊嶋ほか 1984)。また土川(1979)は名古屋大学学生相談所における入学直後の来談事例の大半が不本意入学者であると指摘し、岩村(1977)は広島大学生の「不」適応化の要因として大学・学部への「不一致・不満」を挙げている。かくて、大学生の人格非適応の発生の主因のひとつに所属不本意感があると仮説できよう。

しかし、これら報告の殆んどは国立大学入試制度の改革(所謂「共通一次」制度の導入)前や直後の時代の学生についてのものである。共通一次導入後、国立大学生の所属満足感は全体として継年的に強まる推移を示しているが、人格適応感の継年推移は波動状を呈している(豊嶋ほか 1985a)。かかる適応状況の時代的変遷の中で人格適応感と不本意入学感や準拠集団との関連のあり方が変質したかもしれない。そこで本研究は、近年の大学生でも入学直後時点における人格適応感と不本意感及び準拠集団との間には有意な関連が見出されるであろうという仮説を検証する事を第1の目的とする。次に、不本意入学感・準拠集団・人格適応感の関連性の事例研究によって、大学生の初期適応過程における人格非適応の発生メカニズムと適応化の発生メカニズムを把握類型化の緒を探ることを第2の目的とする。

II 方法

目的1の分析には、昭和59年度弘前大学入学生に対して入学直後(4月・開講第一週)実施した適応状況の質問紙調査²⁾によるデータを使用する。人格(非)適応感の指標としては、この調査研究で基準変数にしている総括的適応感(入学決定から現在までの生活の主領域を時・空間的に広く眺望させた後に反応が求められる、学生としての生活の時空間的な全体的順調-不調感を問う5点尺度に対する反応。「非常にうまくいっている」から「非常にうまくいっていない」まで。中間は「どちらともいえない」。これをSA-total feeling of summarized adjustment-と呼ぶ)が使用される。所属満足-不本意感は、大学・学部・学科専攻・地域への満足度と再受験志望の強度を問う5点尺度項目への反応を、自我中核的準拠集団は『最もかけがえのない人・集団』を問う一肢選択式項目への反応³⁾を、それぞれ指標とする。分析はSAとの相関係数、及び、SA良好群(A群)と中間群(B群)と不良群(C群)の三群間で、所属不本意者の比率や中核的準拠集団の選択の仕方のちがいに差が見出されるか否かの χ^2 検定、とによって行なわれる。

第2の目的の分析のために、昭和59~60年度の入学生で前出の質問紙調査においてSA不良であったが、1年7月時の質問紙調査ではSA良好にまで急速な上昇をみせた被検者に対して実施した半構造的な調査面接のケースと、その対照例に、不本意入学を主訴として相談室に来談した近年の事例のうち準拠集団のあり様を詳細に語ったケースを使用する⁴⁾。調査面接は、大学での目標活動・所属満足感・準拠集団・人格(非)適応感とその理由・傾注活動などを、それらの関連性と変遷過程について1年次終了時点⁵⁾に回顧させた。

III 総括的適応感と不本意感・準拠集団の関連性 - 統計的分析 -

昭和59年度入学生の入学直後時点における総括的適応感 (S A) と所属満足—不本意感 (再受験志望強度も含む) の関連性を表 1 に示した。表 1 の(1)は相関係数, (2)は, 所属満足—不本意感が明確に不満・不本意に傾く者と S A 三群との連関を χ^2 検定により調べた結果である。不本意感はその領域をとっても S A と有意な負の相関関係を持ち, S A 各群に占める不本意者の比率も S A 段階が悪化するにつれ増えていくという強い連関が認められた。従って, 人格 (非) 適応と所属不本意感の間には負の連関があることになり仮説は確認された。なお, 共通一次導入直後の昭和54年度入学生の入学直後時点における両者間の相関係数を表 1 の「54生の r」列に並記したが, 両者間の連関は変質してはおらず, むしろ, 大学不本意感に関しては連関が強くなったといえる (r の有意差検定で $|t| = 1.89, p < .10$)。

表 1. 不本意感と総括的適応感 (S A) との関連性

(1)所属満足・不本意感得点と S A 得点との相関			(2) S A 各群における不本意者				
不本意感の領域	n	r [54生のr]	領 域	S A・A群	S A・B群	S A・C群	$\chi^2(df=2)$
大 学	792	-.433 [-.348]	大学への不本意者	24名(5.8%)	40 (15.8)	48 (38.4)	84.91 ***
学 部	792	-.258 [-.195]	学部 "	16 (3.9)	22 (8.7)	25 (20.0)	34.42 ***
学科・専攻	780	-.229 [-.204]	学科・専 "	35 (8.5)	24 (9.5)	32 (25.6)	29.22 ***
地 域 性	785	-.276 [-.267]	地域性 "	58 (14.0)	59 (23.3)	53 (42.4)	46.67 ***
転学(部・科)志向	791	-.200 [-.159]	転学(部・科)志向者	59 (14.3)	43 (17.0)	42 (33.6)	24.51 ***
r はすべて $P < .001$			S A 各群総計 (%)	414名(100)	253 (100)	125 (100)	

*** $P < .001$ 。

次に, S A と自我中核的準拠集団との関連性は, 表 2 に見る通り, 「大学での友人」特に, クラブや寮での友人に自我中核的に準拠することが良好な S A に結びつきやすく, それ以外の人・集団への自我中核的な準拠は不良な S A に結びつきやすい。今回の対象者と54年度入学生には, 「尊敬する人・師」と「とくになし」の2反応において一方のみで有意な連関が認められるという相違はあるが, 「大学での友人」については両年度ともに同方向の関係がある。従って「大学での友人」に自我中核的に準拠できるか否かと人格適応感の良一悪との間には年度がちがってもやはり正の連関があることになる。

表 2. 自我中核的準拠集団と S A の関連性

自我中核的準拠集団	S A・A群	S A・B群	S A・C群	χ^2 値	
				df = 2	df = 1
大学での友人	100名(24.2%)	54 (21.3)	19 (15.2)	n.s.	A : C 3.97 *
{うち, クラブや寮の友人}	62 (15.0)	37 (14.6)	10 (8.0)	n.s.	A : C 4.04 * B : C 3.37 °
尊敬する人・師	7 (1.7)	4 (1.6)	6 (4.8)	4.98°	A : C 3.94 *
S A 各群総計	414 (100)	253 (100)	125 (100)		
54 大学での友人	112 (26.3)	19 (15.3)	19 (18.6)	7.83 *	A : B 6.37 *
とくになし	27 (6.3)	16 (12.9)	12 (11.8)	7.09 *	A : B 5.74 * A : C 3.54 °
54 各群総計	426 (100)	124 (100)	102 (100)	° $P < .10$, * $P < .05$	

以上から入学直後の S A と入学直後の所属満足—不本意感・準拠集団との間の関連性は確認されたが, 昭和59年度生における1年次前半の所属満足—不本意感・準拠集団と教養部終了時点⁵⁾の S A との関連性も清ほか (1987・本誌所収), 豊嶋 (1985), 豊嶋ほか (1985 b) によって, 大数的レベルで解明されている。すなわち, 1年時前半の S A が不良な層にとって教養部終了時迄に S A が改善されるための1年次前半における生活体制として, ①所属への弱い不本意感や所属の受容,

②クラブ・寮集団への自我中核的準拠、③大学での友人や上級生との交流や彼等との関わりがうまくいっているとの感覚、換言すれば友人・上級生との適応感、④家族との間の適応展望とそれに支えられた密な交流、などが重要と解された。これらは、所属満足—不本意感や、大学での友人や家族への準拠が、早い時期における人格非適応感が改善される過程の発生要因であることを示している。

IV 不本意感—人格非適応感の変容過程の事例研究

はじめに、所属不本意感を主因とする入学直後時点での不良なSA(SA・C)が1年次7月までに著しい改善をみせ、7月時SAが良好段階(SA・A)に達した質問紙調査対象者に実施した調査面接の事例を、次に、対照例として所属不本意感を主因とする強い人格非適応感が長期にわたって持続し、その間、保健管理センター・カウンセリング室に来談した事例を、分析する。分析に際しては、自我中核的準拠集団、進学進路決定に際して準拠した価値、大学入学後にやりたいと展望していた活動(「目標活動」と呼ぶ)、職業展望とその準拠する集団・価値、などが注目される。

ここで目標活動に注目するのは、石郷岡(1982)の言うように、人は将来に向けた展望を投げかけることで生活空間構造を再編—統合する存在であると考えられるからである。第一志望に入学できたか否かとは別に、大学生としての生活で展開しようとしていた目標活動が実現できるか否かの見通しも生活空間構造の安定度を規定し、所属に対する受容度を規定することを通して(非)適応感や(不)本意感に影響するであろう。また職業展望に注目するのは、その実現がこの所属で見込めるか否かが(非)適応・(不)本意感に関連すると思われるからである。この点、所属性との連関は不明であるが、1年次学生の1年間の適応過程を予測させる先行要因の解明をめざした我々の前プロジェクトにより、明確な職業志向・職業展望が後の時点における人格非適応感に抑制的効果をもつと示唆された(豊嶋ほか 1983)のは、職業展望に注目する根拠を与えることになる。

要するに、展望についての三つの観点、第一志望入学、目標活動実現展望、職業展望は、それぞれ、受験期に作った所属先への展望、大学生活の過し方への展望、卒後への展望であって、我々は事例研究を展望の時間性とその準拠集団・準拠体制とに注目して遂行することになる。

調査事例1(1浪・文系男子)： 県外の大都市出身。高校・浪人期とも出身都市の大学を第一志望とするが、その理由の第1は、入学直後も自我中核的準拠集団であり続けている高校・浪人期の仲間と同じように大都市圏の有名大学を指向する価値観によってであり、入学後も帰省して彼等に会うと強いひきめを感じるのである。第2は、高校期からいれあげていた芸術鑑賞によってであり、学生時代にその芸術表現の現場に参加し、現場のわかった評論活動をして、卒業後は関連の会社に勤めるか又は自営業をやりつつ余暇にその活動を展開したいという将来展望をもち、そのためには大都市圏である必要があったのだが、「弘前がイナカなことに失望」し地域不本意感も強い。

他方、自営業展望にとってはその知識修得に有利な現学部を志望学部にしほすが、入学して交流をもった所属学部の先輩達は遊ぶ話題しかもたず、しかも、この学部が《あそびの〇〇学部》と評されている事も知って学部不本意感も強まっていく。かくて全般的な不本意感と、支えられる仲間のなさを理由にして入学直後のSAは不良段階を示した。

しかし、入学1ヶ月後、旗上げ後ほどなく活発な公演活動を展開していた芸術サークル部員と知り合い誘

われて入部、無我夢中でやっているうちに2ヶ月後には役を与えられる。7月調査の中核的準拠集団はサークルであり自我中核的活動もサークル活動。サークルによって深い自我支持をえ、かつ、公演で観客の反応からも充実感をうる。サークルを人格構造の中核に配しそこから支えられる体制が固まり、入学以前の仲間へのひけめは残るものの彼等の位置は自我周辺化して、7月時SAも1年次終了期SAも「クラブで充実」との記述を付した良好段階を獲得、以後この体制で学部期に移行していく。

更に職業的自我は自営業の父に準拠しており、商売しながらやりたい活動も平行して展開する余裕があると認知している事が前述の職業展望を支えている。

彼の場合、①大学での目標活動であった芸術表現活動が困難な地域であるとの認知、②入学できなかった第一志望校への入学を基本的価値とした集団に対する自我中核的準拠、③職業展望のゆえに新たに準拠しようとした所属学部の学生に流れる、遊びに価値をおく学生文化が職業展望を阻害するとの認知、という三要因が、入学直後での強い不本意感と不良なSAをもたらししていたのである。しかし、第一の要因は、目標活動が十分に展開できる新集団を発見しそこに急速な準拠がえができたことによって解消し、また、それに加えて入学以前の集団からの客観的な距離の広がり（客観的なひきはなし）が他県大学入学によってもたされた事を通して第二の要因も背景化、更に、第三の要因は、目標活動とその共同展開集団とが自我中核化したために自我周辺の不満にとどまり、しかも卒業後への将来展望の半ば、即ちやりたい事（芸術活動）の準備は現に展開でき、残る自営業への展望も父へのやや自我周辺の準拠により支えられている。こうして不本意入学感はや背景化し、SAの急速な好転がえられたと解される。

調査事例2（1浪・文系男子）：県外男子。高校期の親友も浪人期の親友も殆んど入学できた地元旧1期国立大学を一貫して志望。高・浪期の親友集団は7月時調査まで自我中核的準拠集団であり続けている。但し、志望学部は転変。「理工系ブームであったから選んだ」高校理系クラスに所属し、家人からの強い勧めもあって現役では理系学部を受験し失敗、浪人初期には文系学部に至望がえ、中・後期には地元就職に有利との動機で現在所属する文系学部にも再度志望がえした。これら三学部ともやってみたい分野の学問領域なのではある。この最終的な志望学部に入ることを基準に、第一志望大学をあきらめ、親からの圧のゆえに第二志望の私立大学（合格）もあきらめ、本学に入学する。しかし「偏差値をみると浪人してまで入る大学じゃない」し、仲間に「弘前って何処？」と尋ねられて耐えられない。学部不本意感はないが、大学と地域性への不本意感が極大で、入学直後の再受験意志も極大であった。「どうしても〇〇大学に行きたいのです!!」との付記が質問紙にある。「大学に入ったからには勉強中心に」という構えと、「読書して利口になりたい」との構えを入学直後すであらわして、『勉強・読書によって利口に』というのが目標活動である。1年間を通してこの構えは持続していく。このうち《勉強して》は「親からそう言われたので」目標にくり入れたものだが《読書して》は内発的なものであった。但し、この第1の目標活動は後出の第2の目標活動に傾注したために1年間を通して「やり残した活動」に留まってしまふ。第2の目標活動は「大学に入ったからには学生でなければいけないことに傾注する」事である。それは例えばバイクのツーリングであり、車であり、そのためのアルバイトであり、下宿や同学部の仲間との軽い交遊の享受である。最大の自我中核的準拠集団は1年間を通して高・浪期の仲間であり続けていくが、その一方で、大学での仲間との順調な対人関係と第2の目標活動への傾注とによって7月時には不本意感はや背景化、「気持がおちついた」としてSAも良好段階に転じる。大学での仲間は以後次第に中核化し1年次末には明確な支えを感じる集団に変成する。

なお、卒業後展望は地元に戻る以外、職業志望は未定。

本事例では、①地元大学に入学を果たせた高・浪期の仲間への自我中核的準拠と「偏差値」による大学序列にこだわる価値態度を主因として、②親への準拠による親の意向への従属を副次的要因

とする入学直後の不本意感・不良なS Aが、次の機制を通して改善されたのである。入学して数ヶ月は親への準拠から生じた第一目標活動への積極的構えによって、次にその行動化を棚上げしつつ構えのみを持続させる事と卒後は帰郷就職という展望との二つで親準拠に伴う葛藤を中和することによって、この大学での生活の受容をはかったのであり、それに平行して、第2の目標活動への傾注が大学の仲間への準拠を次第に深めさせていったのである。この過程で、高・浪期の仲間への中核的準拠も親との準拠関係も相対化・周辺化させる事に成功して、第2の目標活動への傾注を一層強めながら不本意感とS Aの改善がもたらされた。この改善には彼の第2の目標活動「遊び」への傾注を許容もしくはプラスに裁定する教養部期学生文化の存在も寄与していよう。本事例の場合、「理工ブームだから理工系を志望」とか「親からの圧に従い本学へ」といった外部志向と同調との構えが適応様式として見出されるから、「遊び」への傾注をゆるす学生文化の存在によって第1の目標活動「読書」による教養獲得をめぐる不全感は比較的容易に中和されるのである。

調査事例3（現役・文系男子）：近県出身。出身県の国立総合大学を志望。志望学部は現所属に近縁であり、「偏差値レベルは同程度だが⁶⁾共通一次の結果と二次試験科目の関係」で弘前大学に志望がえした。殆んどが地元国立総合大学に入学した高校期の仲間が自我中核的準拠集団であり、彼等への「ひげめ」と1人引き離された孤独感、当地が「イナカなこと失望した」なじめなさなどから、大学と地域性への不本意感が強く再受験を志望する。かかる不本意感に加え傾注活動を見出せないことが相俟って入学直後のS Aは不良段階を示す。しかし目標活動を「自分を高めること」においており、「大学時代が自分にとって何なのかを考える」一方で、下宿での友人関係に受身的にに応じているうちに友人が増え、「心から話せる友人」も出現、さらに下宿の読書家の先輩を目標活動のモデルとして準拠することで、大学時代を《読書をして自分を高める》時期と意味づける。こうして「自分の路だから第一志望大学にいくよりも良かったんだと昔の仲間を示したい気持」「ここで頑張ってみようという気持」が強まり、7月時においては大学の仲間や前出の先輩に自我中核的準拠をみせ、不本意感は消失、S Aも良好段階に転じた。第一志望大学への未練は一年次末に再燃するが、この時点でも、成長したとの確信・大学仲間への強い準拠と良好な関係を主因としてS Aは良好段階を維持し、次年度の傾注展望活動として第1に読書をあげる体制⁷⁾をとっていく。

なお、職業的自我は自営業の親に準拠。自営業の厳しさからサラリーマンを勧める母と、自営が良いとする父の価値態度を折衷し、帰郷して公務員が資格をとって自営業という職業展望を形成。いずれの進路も所属学部においては標準的あるいは理想的とされる進路である。

要するに本事例は、①第一志望校へ入学できた仲間への自我中核的準拠と彼等から離れた孤独感が不本意感を生み、それと②傾注対象の未発見、あるいは目標活動展開の具体的手掛りのなさ、と相俟って入学直後の不良なS Aをもたらしただが、第一に、自我中核的準拠集団から引き離された事が彼等の位置の周辺化を準備し、第二に、「自分を高める」という目標活動のモデルとなる先輩を見出して彼を含む下宿集団が自我中核化し、加えて、この新たな準拠集団との交流の中で成長感、即ち目標活動の実現、をもうることで彼等への自我中核的準拠が深まり、第三に、所属学部も親に準拠して形成した職業的自我に適合している、という三要因によって、不本意感とS Aが急速に改善されたのである。

調査事例4（現役・文系男子）：本学に大量入学する当地高校の出身。当初志望は旧帝大の現所属に近縁の学部。だが、学力のゆえに弘前大学にレベルダウンし志望学部が本学にはないので現所属学部を決めた。学部選択動機は第一に、実生活に役立つ知識を提供してくれるであろうし自分に欠けている社会常識をつけるに好適だから、であり、第二に、親の意向でもある地元就職に有利だからである。そして実は大学の志望

がえも「地元においてほしい親の意思に知らぬまに乗せられた」からであり、ここにも示される如く、入学直後から一年間を通して最も自我中核的な準拠集団は家族であり続け、家族との密な関係も一貫して望み続ける。

入学直後は大学不本意感に加え、友人がいない孤立感に基く学部不本意感と、中核的活動として展望していた学業に身が入らない当惑から、SAは不良。「同じ高校から多勢入学したのに同じ学科に入った友人は皆無でガックリきてやめたくなった」し、「高校時代前半にまったく勉強せずに遊んだ」後悔が、「勉強し教養を身につける」という目標活動を生んでいたからである。しかし、「やめてもその後の方針がない」と思案しているうちに、クラス成員との交流に受身的に吸引されて友人形成、その後は意識的に友人形成に努力、彼等との交流に支えられる一方で、目標活動たる「勉強」をさしあたって語学にしぼりその予習を彼等よりも遥かに先に進める形でやり続けることで目標活動に従事している安心感とともに準拠集団への優越感をえる。こうして、7月時は不本意感が消失、SAも良好に転じた。以後この体制で1年次を過ごすしていく。

本事例では①親への自我中核的準拠から生じた親の意向に共振れしたレベルダウン入学、及び、相対的な自我中核的準拠をみせていた高校期友人からの引き離され、とに基く不本意入学感、②高校期の非適応体験再現の不安と職業志望実現のためとから構想された目標活動に着手できない不全感、という二要因が入学直後の不良なSAをもたらしただのであるが、まず第1の要因は次の機制で解消をみている。即ち、高校仲間から引き離されて一層際立った家族・親への準拠によってレベル・ダウン意識を抑制し、それと併せ、高校仲間が消えて空いた生活空間領域が、受身的な友人体験を契機に形成した学科の仲間によって埋められて生活空間構造が安定するという機制である。そして第2の要因は、目標活動である学業の準拠（比較）対象をこの新友人にすえることで目標活動の展開一達成感がえられた機制である。これには本事例の所属学部は調査事例1と同じ《遊びの〇〇》であるために相対的達成感がえやすい事情も考慮すべきであろう。加えて、学部選択動機であった「社会常識」や志望職業のための知識等は所属学部のカリキュラムによって充たせることも不本意感とSAの改善を促している。

調査事例5（現役・文系男子）：県内山村の出身。「超人願望があり超心理学に強い関心があった」ので私大心理学科を受験するも失敗し、「偏差値からみて入れるところ」として浮上した本学の、志望学科とは無関係の学部を受験。受験の時点で既に「一応入学して再受験のつもり」であったから、「専攻したい学部じゃない！」と訴え不本意感は極大であり、それが入学直後の不良なSAの主因であるとともに、不本意感ゆえに「勉強やる気がしない」事も不良なSAをもたらししていた。即ち、「高校1年次の『五月病』」の轍を踏みたくないし、「大学に入った以上は勉強せねば！」と思うのだが、不本意感からやる気が湧かず、かといって他にやりたい活動もない（目標活動は「なし」）まま「高2以降は良かったと思いがちながらボヤーとしている日」が2ヶ月ほど続くことになる。

最大の自我中核的準拠集団は入学前も入学後も一貫して家族及び親族集団である。この一族は出身村の名士を輩出した中央官庁や県内主要企業の中間管理職や監督者を出していることが本事例のほこりであるが、反面、「自分もやらなければ」との圧も与えていて、学業を一応の目標に据えたのはそのためもあった。

さて、心理学志望ではあったが研究職を希望していたわけではなく一般企業を卒後就職先として漠然と考えていた本事例は、この中間管理職親族から、現所属学部にいればコネ就職を世話できると聞かされる事で再受験意志を弱めていく。さらに、親族である本学上級生から彼のクラブに誘われて入部しそこでも支えられる。また、傾注対象を見出せぬままに、彼の出身村を舞台とした作品をもつSF作家⁸⁾の作品群や他のSFを読みはじめ、そこで超心理学への関心を充たし、SFの他に文芸の小説にも読書対象を拡げていく中で「人生は希望通りにはいかない。しかし、それなりに動いていく」という人生観を作りあげる。こうして、

7月時には再試験意志は潜在化し、S Aも「強い不満や不都合がなく送れているから」という理由を付記した良好段階に転じていく。

他方、「一応の目標」としていた学業に関しては1年間を通して結局傾注せぬままに終るのだが、同じ下宿に勉強家の学部先輩が住んでいて彼を自らの学部移籍後のモデルと位置づけることで、目標実現を学部進学後に延引して不全感を免れていく。

本事例の不本意感は、志望専攻に入れず偏差値に従って入れる大学～学部に入學してしまった不全感に由来し、この不本意感に加え、第一に高校期の非適応体験の再現を回避すべく、第二に自我中核的準拠集団たる出身村「名士」群に伍すべく一応の目標として設定した学業に不本意感ゆえ傾注できない不全感もあって、入学直後S Aの不良段階をもたらした。しかしかかる人格非適応状態からの改善が以下の機制でもたされたと解される。

入学前はほこりの感情を実感していただけであった自我中核的準拠集団・血縁集団が、コネ就職という具体的な職業展望を与えてくれるとともに、クラブでの交流を準備してくれるというように、支持機能が明確化し準拠を強めていった事が第一の機制であろう。更に、出身村を舞台とした作品をもつSF作家の読書体験によって、その村の名士一族への誇り・準拠が補強されるとともに、掌での目標活動（超心理学）に関する代償がえられたのである。次に、学業をやる気がせずになたまたま入りこんでいった読書体験から不本意さの受けとめを学んだのが第二の機制である。この二つの機制を通して再受験意志が弱出し不本意感は相対的な低減をみた。他方、一応の目標に傾注できない不全感は一族名士の如くにはなれない不安も喚起したであろうが、学部進学後のモデルを先輩に発見することで目標実現を先延べできたために、不全感や不安への直面から免れえたのが第三の機制になる。

調査事例6（現役・理系女子）：高校では文系クラスに所属し、文学関係への関心強くそこを第一志望学科とし、また、その活動目標活動にしていたが共通一次の結果その学科は困難と知り、教師からも志望がえを指示される。共通一次得点と二次試験科目を基に家から近い国立大から安全圏を探して、現所属理系学科が浮上、この学科なら職業に直結すると親も勧めるし、その職業にはやりがいがありそうと感じたために、現学科をあわただしく選択した。理系学科なので不安はあったが入学直後では不本意感はまだ潜在的である。この選択過程にも示されているように最も中核的な準拠集団は親であった。

入寮する。そこで学科選択の経緯を話したところ移籍制度や再受験者の存在を先輩から知らされ、「自分の選択は妥協だったのでは？」との疑問が生じ、移籍・再受験を志向するようになる。また寮のイニシエーションや自分を面倒みってくれる先輩への義理で引きうけた寮の仕事などに束縛を感じて、退寮しようかどうかの葛藤状態に陥る。加えて「有利な就職のためには優をとれ」と先輩や親から言われるものの「教宮の研究分野を話すだけ」と感じられる講義形式に馴れず、とうてい優は無理と思える講義が多い。こうして入学直後から数週間の間所属不本意感が顕在化、S Aも不良を示した。

しかし、移籍や再受験を決意しきれずいるうちに、ある理系講義で教宮が「所属にこだわらず自分の時間を使い興味に従ってやるのが大学の学業だ」と語るのに動かされ、「テスト・成績のために与えられたことをやる」ものとしての学業観が変化して「優」への圧は軽減、しかも、高校以来興味があった文系科目は面白くてそれを生活空間における講義領域の中核に据え、かつ、自由時間を趣味的にその勉強に充てる体制を作ることに成功する。また専攻する学科にも深く関わる理系講義から「理系とは暗記物という思いこみ」を打ち破り興味がひかれたことで理系への不安が軽減される。また、「退寮したいのならサッサと！」と勧める親にも支えられ、引き受けた寮務をこなした上で7月までに退寮する。ここで、3ヶ月の寮生活での交流や寮務達成体験から成長感もえ、同時に、寮生活に伴う束縛からの解放と、転科志向のひきがねとなった場

からの引き離され—自我周辺化とがえられる。さらに寮活動を契機に開始された異性との交際に急速な準拠
てえをみせそこでも支えられる。かくて7月時には明確な所属満足感と良好なSA段階を体験する。

本事例の進路決定過程は、高校の進路指導体制や親のとり「興味・適性よりも入れるところに」
という基準を彼等への準拠ゆえに内化し、しかも、彼らの勧める現学科が、本事例の第一志望学科
に比べ職業に直結し易く、かつその職業に魅力を感じられるという職業展望をもったために、志望
がえに伴う不安と不満を抑制する過程を踏んだのである。しかし寮集団への新たな準拠と、親から
の引き離されとによって不本意感と不安が顕在化し、しかも新準拠集団である寮集団による束縛感、
親と寮集団は「優」への圧を発するの理解をこえる講義へのとまどい、等も加わって不良なSA
がもたされた。

この不本意感は次の機制で解消をみる。不安の源泉であった理系講義の教官から、本来の目標で
あった第一志望学科を趣味として位置づけつつその学科関連の講義を学業領域の中心に配する、と
いう学業領域構造化の契機が与えられた機制である。加えて、その理系教官から理系の学業への関
心も刺激されていった。理系教官の準拠（自我周辺の）が適応化を促したと言えよう。

他方、寮集団からの束縛は、最大の自我中核的準拠集団である親によって退寮志向を支えられな
がら、退寮までの間に引きうけた寮務を果たすことで第二の中核的準拠集団（寮集団）との間での
適応をはかる、という二重準拠の適切な利用によって脱しえたのである。そのことは転所属志向を
刺激していた先輩集団からの引き離されをも含意していた。そしてこの二重準拠により、また、寮
生活を通して獲得された思春期的な対象である異性に対し二重準拠をこえて形成した強い自我中核
的準拠により、「成長」感がえられていく。こうして、不本意感の解決と成長感が7月時までの
急速なSA好転を生ぜしめたと解される。

次に、保健管理センター・学生相談室への来談事例から準拠集団のあり方が詳細に把握した来談
事例のうち2例を、人格非適応感と不本意感の改善が見られなかった対照例として紹介したい。

来談事例1（2浪・理系男子）⁹⁾：県外出身。父は病院職員。早くから地元の旧帝大医学部を志望し、
高校・浪人期の医学部志望仲間と父とが最大の自我中核的準拠集団であり続ける。浪人中は受験勉強に身が
入らず成績は低落、3浪は回避したく「とにかく入れるところ」という規準で本学理系学部を選び入学する。
この学部は近隣国立大理系のうち最も難易度低いとされる群に属する。しかし友人には飽くまで医を目指し
3浪を選んだ者もあった。大学・学部・地域性の全てに不本意感が極大。「医師になる夢を見失いつつある
自分」にも不満が強い。とはいえ、父は「もうどこにでもおちついてくれ」との意向であるし本事例も「入
学したからには友人を沢山作って」SAを向上させようと試みる。しかしその構えの下に先ず友人作りを開
始した下宿先は医学生下宿であった。多浪経験者や大卒後の医学部入学者などとの交流もそこで開始され、
更に、1年前に本学医学部に入学していた高校期の友人との交流も再会されるに至って、ゴールデン・ウィ
ークまでには「今の学部の勉強には全く意欲を感じない。やはり医師がやりがいがありそう」として再受験
に強く傾き、帰省して父に相談する。この訴えに父は《五月病》を疑ってカウンセラーに電話相談。その1
ヶ月後、本事例が再受験志望を主訴として自発来談する。「現学部に入って医に行きたい自分を再確認した。
3年間の受験生活を反省している。どの医学部にせよ共通一次で100点以上の上積みが必要だが、この大学
の授業と再受験準備とを平行できるほど自分は器用じゃない¹⁰⁾。 どうしよう?」という内容であり、100
点の上積みは至難であろうとの現実認知をカウンセラーと共有したのち、受験までの生活体制を話し合い、
「あとは自分で考えます」と1回で終結になる。以後、SAは中間～不良の段階に留まりながら再受験に傾

注。父は10月段階まで再受験を支持しなかった。1年次の取得単位数はゼロ。しかし3月、国立医科大学に合格し退学していく。

本事例は医師になることに鋭く焦点化した目標をもち、病院勤務歴のある父と医師志望受験生集団とに自我中核的準拠を示して長い受験生活を過したが、学力低下の故に己むなく入学した強い不本意感から逃れるべく、また、父の「もうおちつけ」との意向にも準拠して、不本意感と不良なS Aとからの脱出策として「友人作り」を展望したのである。しかし医学部に入れなかった現実を受容できぬまま積極的に開始した目標活動・友人作りの場が、医学部再受験を励ますだけでなく、医学生という本事例の本来の目標にとってリアルなモデルとなる集団であった。これまでの医学部志望者集団にかわって彼等が新たな、現実的な、自我中核的準拠集団として強く立ちあらわれるに及んで、再受験志向が固まり、そのために、まだ接触していない所属学部学業への関心をひきあげる事を合理化し、更に、これまでの中核的準拠集団のひとつであった父の、再受験不支持圧を排除して、父を自我周辺化していったのである。とはいえ、100点の上積みが至難とは認知しており、かくて、再受験に鋭く焦点化しつつ、不本意感と不良なS Aは通年持続した。

来談事例2（2浪・文系男子）： 県外遠隔地出身。父及び親族は大企業や数十万の人口を擁する都市の指導者であって、本事例は彼等に準拠して社会的評価の高い職業への進路展望を作り、父もそれを強く勤めていた。即ち〈一流大学〉の法学部から大企業へ、もしくは医師という展望である。出身は全国的な有名高。高校時代はこの高校での文学仲間・自治活動仲間の中核的準拠をみせ、また高校生徒会活動が活発だった時代の生徒会長をもつとめる。仲間の殆んどは現役か一浪で所謂有名大学の第一志望学部に進学し、残る少数の仲間は進学せずに「自分の人生感に従った路」を主体的に切り拓いていると言う。この集団成員への失恋が契機となって、本事例は好きな作家達の故郷である東北に逃避すべく本学文系学部を選び入学するが、「都落ちして文学をやり将来はこの地で文学系の教師をやる¹²⁾」と言うようにやや積極的な職業展望ももった選択であった。他方、父の態度は「医または法への再受験なら何年かかっても許す」として本事例のとりわれを強化する機能を一貫して果している。

パースナリティは過敏で不安定。入学直後はじめて体験した入眠時幻覚から分裂病の恐怖を感じて来談し、以後、不本意入学や前出の片想いの恋人との関係を巡る葛藤などを主訴として不定期に来談するほか、自分の文学活動へのコメントを求めても頻繁に来談した。この地での目標活動は第一に文学活動であり、次に「津軽出身作家DやKの蹟を訪ねる旅行に行くかもしれない」と告げて本事例と別れた失恋相手が弘前を訪うのを待つことであった。後者は遂に実現をみなかったが前者については、ある東北出身作家の専門的研究会に入会して宿泊旅行に参加したり研究発表を行なう事で実現されていく。

この研究会で学生会員女性との交流も作れ、掌での恋人の代償と位置づけようと試みていったし、対人関係形成能力に優れ、同学部の同期生との交流も盛んで、一目おかれる存在としての地位も形成していく。しかし、これらの対人関係は本事例にとって十分な自我支持を提供しない。同学部同期生は目標活動に無縁であり、研究会メンバーの女性も旧来の中核的準拠集団と比較すれば「文学的レベル」でははるかに劣ると本事例は入学2年目になって認知する。かくて連休になるとしばしば各地の大学の掌での友人を訪ね、彼等が文学的-政治的活動集団を形成できていることに羨望して、弘前に戻るやカウンセラーのもとに当地の友人たちの不活発さを嘆きに来談し、当地への不本意感を再確認するとともに、学部不本意感を強め、1年次秋には医学部再受験意思を固め（とはいえ再受験準備には全く傾注せず、目標活動に傾注）、国立大学医学部を再受験する。共通一次自己採点は当該の大学学部では上位レベルであったが不合格。1年次取得単位数は極く少なく教養留年となる。

2年目は当地への残留か再受験かの葛藤をひきざりながら研究会への関与を一層強めていくが、研究会女

性メンバーと、この学部での友人達による自我支持が不十分なこと、父の受験奨励の構えが変わらないことを確認して再々受験に傾斜、「ランク」を下げて公立大学医系を受験し合格・退学していく。以後、運動部に所属、「好調ですと伝えてくれ」と、遊びに行った本学友人にカウンセラーへの伝言が託された。

本学在学中は一貫して不調感が強く、もし質問紙調査を実施していればSAは一貫してC段階を示したと推定できる。

本事例の不良なSAと不本意入学感は、高校期の仲間と恋人への自我中核的な準拠と、彼等が当然の如く進んでいる有名大学→高い社会的評価の職業、もしくは大学には進まず自分の志向性に従った文学-政治活動の追求、のいずれからも遠い自分の劣等感といらだち、そして、次第に自我周延的な位置に後退したものの依然準拠している父や親族がモデルを提供している社会的地位から感ずる圧、更に、父の示す再受験奨励の構えなどからもたらされたと解される。かかる準拠のあり様は2年間にわたり持続されたが、改善の契機は二つありえたと思われる。第一は、目標活動であった文学活動の研究会参加であり、第二は、恋人という中核部の喪失とその代償としての新対象を研究会女性メンバーに求めた点である。しかしそのいずれも旧来の中核的準拠集団に比べてはるかに弱い自我支持をしか提供せず非適応感が深化していく過程で、進路選択に際して本事例が準拠し、父もまたそれを支持する〈ハイランク〉志向の価値が前景にあらわれて再受験行動とその成功によって自我均衡を回復していったのである。

V 不本意感-人格非適応感の〈形成-解消〉発生パターン

前章では入学して間もない時期における不本意感-人格非適応感の形成メカニズムとその解消・改善のメカニズムが事例ごとに考察されたが、本章では事例の共通性や対照性をもとに不本意入学感を主因とする人格非適応感の〈形成-解消〉のパターンの抽出がめざされる。なお、〈形成-解消〉パターンは豊嶋ほか(1987)が試論的に提出したが、ここではその詳細化が行なわれる。

(1) パターンA 自我中核的準拠体制の変更による解消(「準拠がえ」型)

入学前に自我中核的に準拠していた集団又は価値体制との関連で強い不本意感が生じるが、その後の準拠がえによって解消~改善する型であり、さしあたって2下位型に分けられる。

1) A-1 不本意感を喚起する中核的準拠集団から現所属を受容する集団への準拠がえによる解消へ(「中核的準拠集団の変更」型)

第一志望進路に進みえた仲間が最大の自我中核的準拠集団であったことによって喚起された不本意感・非適応感が、現所属での生活を受容もしくは享受する新しい仲間への準拠がえによって解消していく型であり、調査事例1~3、来談事例1・2の計5例はこれに該当する。

この5例とも受験期~入学直後にかけての最大の中核的準拠集団は次の特質をもつ。即ち各事例が進みえなかった第一志望進路先に進んだ友人達であったり、あくまで第一志望に固執し多混中の友人達(調査事例1)だったという点である。そしてこのことが、彼等との比較によって「ひけめ」といった劣等感が鋭く意識される非適化機制と、それと同時に、中核的準拠集団からひとり引き離された孤独感や中核的準拠集団の喪失感(つまり生活空間構造中核部の喪失感)によって自我

構造が不安定となる機制をもたらししている。来談事例2の入眼時幻覚とそれに対する脅威との認知は、後者の機制の所産と解されよう。これらの機制は、石郷岡(1982)が青年期の挫折を中核的生活空間領域が崩れ去った状態とみてその5型を提出したうちの「中核領域喪失型」に類似の機制と思われる。

しかしこのパターンの非適応は適応化への二つの契機を内包している事が注目できる。その第一は、中核的準拠集団を第一志望仲間にしていた(にすることができた)事からもわかるように、同年令集団とのかかわりへのレディネスが形成済みであること、それに加え友人関係を自我中核的に位置づけるレディネスも形成されているという契機である。第二の契機は、孤独感や不安定感をもたらした中核部の空席を埋めようとする傾向である。そしてこの2つの契機の合力として《この大学・この所属での新友人》を中核に配した生活空間構造を形成する構えがあらわれてくる。来談事例1・2はこの構えを意志的・積極的にあらわし、調査事例1~3は新友人との、調査事例6は寮先輩との、夫々受身的な交流の中で、この構えが意識化されていった。かくて来談事例2以外にあっては、新対象との交流の展開につれて彼等の自我中核性が強まっていくが、それと平行して、彼等が不本意感を刺激するかそれともここでの生活を受容・享受する方向の雰囲気をもつかによってふたつの異なる過程が進行していく。前者、不本意感を刺激する新たな集団を中核部にとりこんだ場合、調査事例6や来談事例1のように不本意感が一層するどくつきつけられ深い人格非適応感をもたらされるのに対して、後者の場合、不本意感の源泉であった嘗ての中核的準拠集団が次第に自我周辺化していく一方で、中核部にはこの大学・学部学科での生活を受容または享受する新友人集団が浸透し、その結果、不本意感の背景化とSAの急速な改善をもたらされることになる。

ここで来談事例2の場合は、旧来の中核的準拠集団が、第一志望進路先を同じにしていた集団のみならず、中核的な目標活動(文学-政治)をも共有する集団をも含み、しかも、「恋人」をも包摂していた、という点で「基本的集団」(安倍 1956)であったがために中核部の喪失感は深く、当地での新集団は代替として機能しえなかったのである。即ち、掌ての中核的準拠集団が代替困難な基本的集団としての広さと深さをもっているか否かも 不本意感-非適応感の解消され易さを規定するのである。

最後に調査事例4について触れたい。この事例は後出のパターンC-1が基本的な機制になるが、加えて、A-1の原型と思われる機制も見出すことができる。彼の場合、弘前大学に大量入学する高校の、現役入学生であったのに、同じ学科に友人がいなかったことが不本意感を強め、その学科の同僚から誘われ受身的に交流しているうちに彼等が中核化した事も、不本意感の解消に寄与している。このように、手近に掌ての友人-知人がいない事に基く中核部の不安定が新所属の同僚からの誘いを機縁とする彼等の中核部浸透によって安定していく機制は、例えば小・中・高におけるクラス変えに際して見出される適応過程、もしくはより広く、新環境で行動を共にできる新対象の発見を契機とする馴化過程に、一般に指摘できる機制と思われる。

2) A-2 「偏差値」への準拠に基く不本意感-非適応感から、現所属での生活を享受する新集団への準拠による解消へ(「中核的準拠価値の溶解」型)

A-1型においては掌ての中核的準拠が「第一志望を同じくしていた友人*」という具体的人的対象にむけられていたのに対して、この亜型の場合は受験-進学行動の中核的準拠枠が現在の受験文

化を支配している「偏差値体制」にある点が、両亜型を分化する。この亜型にあっては、その後かかる価値体制が現所属での新対象との交遊を受容することによって溶解していき、それが不本意・不全感を後景に退けていく。調査事例2にこの過程は明確に認められ、調査事例4にも介在する。

(2) パターンB 抑制されていた学業興味-適性志向の展開通路の発見による解消（「興味-適性の展開通路発見」型）

安全志向や有利さ志向の受験文化への準拠によって抑えられていた学業興味-適性への志向性が入学後に意識化される事に基く不本意感・非適応感が、学業への興味・適性観をみたく活動やそれを支える集団を見出すことによって解消をみる型である。

専攻学業への興味-適性よりも〈入れるところ〉を規準に進学進路を選択する受験文化が根づいたと言われるが、我々の昭和52年度以来の入学直後質問紙調査の結果をそれを半面で裏打ちする。即ち、「将来の就職を見越しつつ職業や資格への有利さを重視し、……学力による規制をうけながら入学してくる学生」が次第に増大したのである（豊嶋ほか 1985）。しかし残る半面では専攻や適性を重視する傾向の強まりもまた見出される（同）。かかる一種の文化葛藤のもとでは、興味-適性観を明確化できていた者がその充足志向を抑制または抑圧して「安全・有利さ志向」をみたく選択行動を択ってしまった場合、「自分の選択が個人的にも文化的にも誤まりだのでは？」という不確実感が顕・潜在することになろう。勿論、逆の場合、即ち、興味-適性志向で選択行動を択りしかも合格できた場合は、ふたつの文化に同時に適応し、しかも大学社会の伝統的な文化である興味-適性重視の価値体系にも適応するわけだから、不本意感の発生は考えにくい。

この型の不本意感によって人格非適応がもたらされても、「安全・有利さ」志向は即ち充たされているから、興味-適性観に適合した活動領域をこの所属の中で発見できれば、不本意感-非適応感是比较的早期に解消をみることになろう。それによって両文化への適応、両志向性の充足がともに果たされるからである。調査事例5・6がそのケースであって、入学した所属先の学業とは別の水路を発見する事を通して解消がもたされている。事例5の場合は、読書を通して、事例6の場合は、興味の向いていた講義の受講と趣味としての追求とによってであり、しかも三例ともに現所属は有利な将来を約束すると認知されているのである。

対照的に、来談事例1にあっては、安全志向で入学した学部・学科は、有利な地位を約束してくれないし、狭く硬い医師志望を興味-適性観にしている以上、医学部以外での充足通路は存在しえない。これにA-1の型で生じた不本意感もあいまって、医学部への志向が再燃していく。安全さと有利さとが両立しない選択であった。

(3) パターンC 展開困難と認知した目標活動の達成を支える準拠集団や実現水路の発見による解消（「目標活動の水路発見」型）

「入学後に展開しよう」と考えていた目標活動が、入学してみると展開困難なことを認知し、それに基き不本意感-非適応感が生ずるが、目標活動の達成を支えたり、達成展望を形成するための準拠集団を発見する事によって解消をみる型である。目標活動が所属先の学業もしくは勉学一般であって、その達成が公的な社会通念をも含意する場合と、目標活動がインフォーマルな活動である

場合とで、2つの亜型に分化できる。

1) C-1 目標活動であった学業や「教養」修得の展開困難度から学業にとっての新準拠集団の発見による解消へ(「学業の準拠対象発見」型)

前節のパターンBに近似だが、Bにあっては専攻学業、即ち興味-適性観に適合した学業、を目標活動にしてはいなかった点がC-1との基本的相違点である。また、この亜型において意味のある準拠集団は必ずしも自我中核的なそれである必要はなく、周辺的な、単なる比較集団 Comparison reference-group であってもよい点が特徴となる。

大学又は教養部組織の公的課題である「学業」や「教養取得」を目標活動にしている場合、その達成への不安・不全感・達成展望の作れなさなどは、人格非適応感のみならず、大学組織での公的な社会(文化)の非適応感をもたらす。加えて、学生の家族も多くの場合学業成就を強く期待するために対家族の社会適応の一基準にもなるから、多領域にわたる非適応感が形成されていく。かかる両側非適応感とは調査事例2~6に見出される。但し、調査事例2・3では家族への準拠が相対的に弱いために家族との間の社会非適応感は薄いままで済んでいるが、4~6の三例では家族に中核的準拠を示していたために、学業を巡る困難感が「家族に悪い」との罪悪感を促して家族との間の強い社会非適応感も存在した。また、高校期に学業-学校生活非適応体験をもつ調査事例4・5では、大学生活での目標活動を学業に据える事で高校期学業の領域での不全感を補償しようとしたのだが、「大学での学業行動」の手掛りのなさや講義に集中できない自分を発見することによって、補償の失敗感も両側非適応感に加わることになる。

さて、この型の不本意感-非適応感が解消していく過程には、学業行動の準拠対象が何かによって3つのパターンが存在する。

① C-1- α 学業志向の弱い学生文化に準拠した合理化(「学業非志向の文化への準拠による合理化」型)

これは、「学業からのモラトリアム期」(豊嶋 1980)としての教養部期の学生や、学業を周辺に配して学生生活を享受する構えが一般に強い学部・学科(例えば<遊びの〇〇学部>といった風評のある所属)の学生において、とられ易い水路であろう。いずれも周囲の学生や友人達の雰囲気・価値体制が非学業志向である事を認知して、それとの比較で自分の不全感を合理化して解消がみられていく。

教養部期である事によって解消をみた事例としては調査事例2・3・5がある。学業-教養修得活動はやらないか、不十分に展開するだけなのだが、<学部に移ったらやる>という先延べの構えを形成することで、不全感から免れ安定化していく。

<遊びの〇〇学部>にいる事によって解消をみた事例としては調査事例4がある。学業への構えの弱い同じ所属の友人たちと比較する事で、学業達成のために試行錯誤したり予習をしたりしている自分が「彼らよりまし」である事を発見し安定化したのである。

② C-1- β 目標活動(学業)を趣味領域で追求する代償による解消(「趣味としての追求」型)

目標としていた特定の学業を専攻にできなかった事によって生ずる不本意感-非適応感とは、当該分野への追求を要求水準に合った形で私的に遂行することができれば解消をみる。この点、教養部制度は、多分野の講義を開講し、しかも<教養習得>を制度的目的にしているがために、当該分野

への関心を講義で充たすとか純然たる私的活動で充たすことが許容されるのみならず、もし充たしえればそれは「公的な文化適応」感をもたらすことになる。

「超心理学」への関心を読書でみたし、しかもそれを契機に生きる耐性を文学作品から学んだ調査事例5、本来の関心対象であった文学を教養部講義と趣味領域での追求とによって代償した調査事例6は、この歪々型の解消機制も改善に寄与している。なお、これは要求水準が高くない場合のみ解消をみやすい機制であろう。高い場合は趣味としての位置づけによっては充たされず再受験に傾いていくと想定されるが、それは仮説に留まる。

この歪々型は準拠集団に注目する必要性は薄い。

③ C-1- γ 学業行動のモデルを発見し学業行動を展開できたり、モデルに倣った生活体制を形成することによる解消（「モデル発見」型）

学業—研究を中核的規範 pivotal norm (Shein 1968) とする大学組織にあつては、学業・教養・研究へのかかわり方のモデルとなる多様な人的対象が存在することによって、自分の学業行動の準拠枠の発見—変更が比較的容易に行なわれよう。調査事例3・5の場合、そのモデルが同じ所属の勉強家の先輩であり、しかも前出のC-1- α 型の合理化（即ち、学部にあがったらあの先輩のような学業行動をとろうとの構え形成による合理化）も寄与して、解消がみられていく。調査事例6では、自分の本来の興味がむいていた文学を、副業として位置づけつつ展開している理系教官が第一のモデルであり、更に、不得手と思こんでいた理系学業への興味を喚起してくれ手掛を与えてくれた教官も第二のモデルとして機能している。

2) C-2 目標活動であったインフォーマル活動の展開困難感から、それを支える新集団の発見による解消へ（「インフォーマル活動展開の支え発見」型）

目標活動を大学組織の公的目標（学業・教養）にはおいていない層の不本意感—非適応感の主因のひとつに、受験学業からの解放期としての大学期に実現しようとした、趣味的な informal 活動が展開困難との認知がある。大学生活の目標をそこにおいていたために、この所属・この地域では展開できないとの認知が不本意入学感を喚起するのである。しかし学業からのモラトリアム期としての教養部期においては、かかる informal 活動を展開する時間と新集団とがえられやすいであろう。もしそれがえられれば、既に入學以前から当該活動を高水準で展開した体験がない限り、新集団の中で深く支えられることになる。見田（1970）の言うように、「仕事での自己実現」とその場での「他者との交流」によって「生きがい感」がえられるのであり、目標活動がやれる芸術サークル集団を見出して活動にいれあげその集団を急速に自我中核化していった調査事例1が、この型の典型例となる。即ち、informal な目標活動を彼の要求水準に適った水準で共に展開できる新集団を発見してそこに参入する事によって、不本意感—非適応感は解決をみ当該集団が新たな中核的準拠集団として彼を深く支えていくのである。来談事例2が非適応感を持続させながらも2年間この地に留まったのも、文学研究会がこうした質の集団になるのではないかの期待によっていたであろう。

しかし新集団による自我支持が要求水準を下まわるとき、来談事例2の如く、不本意感—非適応感は慢性化していく。

とはいえ、informal な目標活動の実現がえられなくても、学業をある程度達成できるか、その展望や自信をもてれば、大学への公的な社会非適応感からは免れることができるから、彼の人格非

適応は弱いもので済むことになろう。そしてそのために来談事例2は2年間を当地で過ごしたの
である。

(4)パターンDのためにー職業展望をめぐって

調査事例1と来談事例1の検討から、職業展望の実現困難な所属に入学した場合、その展望を放棄または周辺化して、学生生活の焦点を目標活動に移す体制がえと、それを支える新準拠集団の獲得とが、解消の一要因になる事が示された。調査事例1は、自営業展望に有利とみこんだ所属先がそのための知識普及に不十分と認知したことによって不本意感が顕在化したが、インフォーマルな目標活動の場をサークルに見出すことを通して、職業展望を周辺化しつつ不本意感が解消された。その対照例が来談事例1であって、体制がえすべく焦点とした友人形成という目標活動が却って不本意感を刺激していったのである。

しかし両事例が示す〈形成ー解消〉パターンは前節のC-2・「インフォーマル活動展開の支え発見」型に還元できる。職業展望との関連で形成と解消との双方が生じた事例は今回の調査対象者に存在しないし、保健管理センターに来談した1年次学生で職業展望の困難ー再編による〈形成ー解消〉の全過程をフォローできた事例も見出しがたい。職業展望を中軸とするパターンは、職業展望をリアルに吟味する必要性の薄い教養部期には出現しにくいとも考えられる。

そこで以下では職業展望を巡る〈形成ー解消〉パターン(D)の探索の緒にする目的で、前出事例からの示唆を列挙したい。

〈解消〉要因としては次の三機制を抽出できよう。

i. 職業展望が実現可能と認知できる所属先であるための、目標活動に焦点づける余裕

職業展望が結晶化しているか、それとも単に「つぶしがきく」といった水準の一般的な有利さ確保の域に留まるかを問わず、職業展望が実現可能な所属先にいることや、志望職業に関連する知識・技術が修得可能と認知できる所属先にいることが、職業展望とは異なる目標活動をもつ学生にとって目標活動に傾注する余裕を作る。そのために不本意感が背景化する機制を調査事例1,2,4,6に認めることができる。

所属先の制度的職業進路や基準(標準)的な職業進路との間の不協和が 下¹³⁾のために、それらへの準拠体制を作りやすく、そのことへの準拠体制を作りやすく、そのことが他の要因に基づく不本意感ー非適応感を緩和する効果をもつといえよう。

ii. 家族(親)準拠に基づく職業展望の実現可能な所属先であることによる解消

家族の意向に従う形で職業展望を形成した調査事例3・6や、家族の職業をモデルしている調査事例1などがこの例である。家族に準拠した展望をもつ事により、職業的自我と家族との間の良好な適応関係が保証されるし、職業展望が実現可能な所属先であるためiの要因も加わって適応化が促がされることになる。

逆に来談事例2においては、親の意向が本人は一応周辺化した医師又は法→企業幹部を指示し続けたことが、本人の医師か教職かという葛藤の1因となっているから、iiの対照事例と見做しうる。

iii. 職業展望未形成または不明確な入学者が、所属先が就職に有利との認知を準拠集団から強力に与えられる事による解消

調査事例5がこの例である。中核的準拠集団である親族達からの「現所属ならコネ就職に有利」という情報によって、未形成だった職業展望が見えだし、しかも彼等がコネ採用の権限を握る職位にある事によって職業展望は一層現実味を帯びる。かくて親族集団への準拠を更に強める中で不本意感が解消する機制である。

他方、〈形成〉要因については、調査事例1において、職業展望の具体的モデルをもちかつ実現に有利と期待していた所属先が、展望実現に不十分な事を発見することが、〈形成〉をもたらす、と示されている。この場合、職業展望が相対的に結晶化していることが前提となろう。とはいえ彼にあっては職業展望のフラストレーションは不本意感の周辺の事由に過ぎぬとも見られる。一般化は差し控えたい。

VI 総括と展望

本稿では先ず、学生相談活動の標的が適応援助であることを述べ、適応援助が実践とともに学を志向する限り適応—非適応の発生類型論が要求されると主張した。その観点として、中層接近的社会心理学に拠る我々の適応理解の鍵概念である準拠集団—準拠価値、一般に大学生の非適応の主因のひとつと解されている不本意入学とを選び、「準拠集団のあり方と不本意入学感とは大学生の人格非適応感の要因である」という仮説を昭和54年度入学生への調査結果から導出し、それを昭和59年度入学生からえた資料によって統計的に再確認した。

次に、昭和59年度入学生のうち入学直後の不得意感を主因とする人格非適応が早期に改善した事例に対する調査面接と、その対照例として不本意感—人格非適応感が持続し退学—他大学受験の路をあゆんだ来談事例に対するカウンセリング例とから、計8例を選び個別事例研究が行なわれた。その際、各事例の個別的・特殊な機制的記述とともに、第一志望入学か否か、大学生生活でやろうと展望していた目標活動、及び、卒後職業展望という三つの展望の内容とその実現度・実現可能性の認知とに焦点をあて、自我中核的準拠集団や各展望夫々についての準拠集団—準拠価値との関連性が分析されていった。

かかる個別事例研究を踏まえ、第V章においては、「個別性から類型化へ」という本論の立場に則り、不本意感—人格非適応感の〈形成—解消〉発生パターンA～Cが提出された。パターンA・Bは第一志望先への入学でない場合の〈形成—解消〉パターンであって、パターンAを「準拠がえ」型、Bを「興味—適性の展開通路発見」型と名付けた。パターンAには下位型として、A-1「中核的準拠集団の変更」型とA-2「中核的準拠価値の溶解」型とが見出された。パターンCは目標活動の展開困難感を因とする不本意感—非適応感の〈形成—解消〉パターンであって、「目標活動の水路発見」型と名付けられた。これは、目標活動が大学組織の制度的目標である「学業」修得に一致するか否かを分化規準として2つの下位型、C-1「学業の準拠対象発見」型及びC-2「インフォーマル活動展開の支え発見」型、に分けられ、更に、C-1は「学業非志向の文化への準拠による合理化」型、「趣味としての追求」型、「モデル発見」型の三つに細別できた。学業を目標活動に据えていた場合、その展開困難感とは人格非適応感とともに大学の公的制度的組織に対する社

会（文化）非適応感や、学業達成を期待する親に対する社会非適応感をも喚起することになるから、様々な対処行動の試行が迫られようし、その際に利用できる人的・制度的資源も多様になるとと思われるから、C-1については今後の事例の蓄積により多くの亜型が発見されるかもしれない。

なお、職業展望をめぐる〈形成-解消〉の事例は見出せなかったので、形成要因、解消要因を夫々指摘するに留めた。このパターンも今後の事例の蓄積を俟つことになるが、職業展望の吟味が迫られる学部期にまで追跡のスパンを伸ばす事によって〈形成-解消〉発生パターンが捉えられそうではある。

以上の7型と職業展望に関する諸要因とによって全事例の〈形成-解消〉機制はほぼ説明できることになる。勿論、1つの型のみで説明可能な事例は皆無であり、複数の型の重合によって〈形成-解消〉が生じている事は言うまでもない。不本意感・非適応感は、様々な水準の展望の実現困難性の複合において形成され、その夫々の準拠体制の調整の複合において解消や持続が生ずるのが一般的と思われるからである。

さて、本論で提出した発生パターンには実は2つの理論的問題がある。その第一は、類型論としては未完成であるという問題である。類型とは本来、①類型構成のための複数の相互独立的な規準属性の設定、②当該属性の有無もしくは強弱による分割、③採用した規準属性の数分割数のマトリックス上に個別事例を配置、という操作によって論理的に構成されるものである（菊池 1984）が、本論では、基準属性として「展望の時間水準」と、「準拠集団や準拠体制のあり方」とったものの、前者は実は峻別困難であり、後者は分割基準が不鮮明である。かかる隘路は、発生パターンを帰納的に「抽出」する方法によってもたらされたとも解されるが、発生類型に昇華するためには類型構成論からする再検討が要求されよう。なお、後者、準拠のあり方を分割する視点としては、豊嶋（1986c）が今回紹介した事例の1部も使用して試みた、準拠集団の三機能（比較、規範、audience）に注目した分析が有効かもしれない。

問題の第二は、不本意感-人格非適応の形成と解消が密接に関連している現象的事実に基づいて〈形成-解消〉をとともに説明しうるパターンを求めた点である。形成の発生パターンと解消の発生パターンを独立に検討する方が適切であるかもしれない。というのは形成の場の力学と解消のそれとは異質である可能性があるのに、〈形成-解消〉として一括しようとの構えによって異質性を切り捨ててしまったおそれがあるからである。

要するに、事例の蓄積と類型構成論・類型化論に基く論理的考察とが今後の課題になる。

註

- 1) 準拠集団による自我支持機能の検討は豊嶋（1986c）を参照されたい。
- 2) これまで本誌に発表してきた「大学生の適応」に関する一連の研究で使用した質問紙である。内容は文献24)・25)の付を参照されたい。
- 3) 選択肢は、「①家族との関係、②高校（中学・浪人時代）の友人関係、③大学での友人関係-クラブ・寮以外一、④クラブ・寮での対人関係、⑤尊敬する人や師との関係、⑥恋人や異性との関係、⑦とくになし、⑧その他」である。集計に際しては先ず③と④を「大学での友人」として

一括した。

- 4) 不本意入学や再受験を主訴とする来談事例の殆んどは、ガイダンス・レベル又は不本意感のうけとめを中心とする相談で終結し、準拠集団との関連をまで語る事例は稀である。
- 5) 弘前大学では医学部生を除き2年次から学部に移籍されるから、殆んどの学生にとってこの時点は教養部終了時点になる。
- 6) 事実としては弘前大学の方が低い。この言葉は防衛である。
- 7) この時期の「次年度傾注展望活動」は圧倒的に専門の学業(57.1%)。読書をあげるのは0.9%に過ぎない。
- 8) この直木賞受賞作家が多作する伝奇ロマンのテーマのひとつに、本事例がゆめみている超人譚がある。
- 9) 入学直後の質問紙調査を受検している。
- 10) 本学では再受験は願出によって許可するが、そのための休学は認めず、大学学業も果すことを条件にしている。
- 11) 質問紙調査は受検していない。
- 12) 好きな作家の1人は東北の教師であった。
- 13) Hilton, T. (1962)の進路選択に関する意志決定モデルに拠る。

文 献

- 1) 安倍淳吉 1956. 「社会心理学」共立出版.
- 2) 同上 1969. 社会心理学研究法 北村ほか編「心理学研究法」誠信書房, 597—667.
- 3) Hilton, T.L. 1962. Career decision-making *Journal of Counseling Psychology* 9(4), 291—298.
- 4) 細江達郎 1984. 大学新生の「非適応」に関する社会心理学的接近—青年期全体の適応体制と大学生の準拠構造をめぐって— 東北大学生相談所紀要 1, 3—8.
- 5) 同上 1975. 大学新生の適応構造の社会心理的状況 東北大学学生相談所紀要 2, 1—8.
- 6) 石郷岡 泰 1982. 挫折の「診断」 原谷ほか編「青春からの出発—人間解放の青年心理学」アカデミア出版会, 235—256.
- 7) 岩村 聡 1977. 学生の不適応について—主として修学・進路相談の観点から— 広島大学総合科学部学生相談室活動報告書 2, 26—45.
- 8) 菊池武烈 1984. 類型論的理解の意義 石田・武井編「犯罪心理学—青少年犯罪者の生活空間と類型論」東海大学出版会, 29—47.
- 9) 児玉隆治 1986. 『シンポジウム—精神科医の問題点, 心理カウンセラーの問題点』のうち児玉の抄録 第7回大学精神衛生研究会報告書 茨城大学, 179—182.
- 10) 峰松 修 1985. 治療オリエンテーションと教育・発達オリエンテーション—カウンセラーは精神分裂病学生にどうかかわるか— 第23回全国大学保健管理研究集会報告書, 300—303.

- 11) 見田宗介 1970. 「現代の生きがい—変わる日本人の人生観」 日本経済新聞社.
- 12) 西園昌久 1986. 治療の長期化をめぐる問題—総説 季刊精神療法 12(2), 2—9.
- 13) Schein, E. 1968. Organizational socialization and profession of management *Industrial Management Review* 9, 1—16.
- 14) 清 俊夫 1974. 学校場面における文化非適応に関する社会心理学的研究 年報社会心理学 17, 151—165.
- 15) 清 俊夫, 豊嶋秋彦, 細川 徹, 芳野晴男 1987. 大学新入生における適応過程予測因の時代的変遷—入試制度変動期と定着期における適応過程の比較から— 弘前大学保健管理概要 10(本誌).
- 16) 末廣晃二 1986. センター内カウンセラー(心理学)の立場から 第23回全国大学保健管理研究集会報告書, 53—55.
- 17) 豊嶋秋彦 1983. 4年次学生における入学時～4年時点の適応の構造 第20回全国大学保健管理研究集会報告書, 145—146.
- 18) 同上 1985. 大学生における適応過程の時代的変遷(3)入学後1年間の適応過程 日本応用心理学会第52回大会論文集, 21.
- 19) 同上 1986 a. 新入生における適応回復過程の事例研究—非来談層への面接調査による— 第23回全国大学保健管理研究集会東北地方研究集会報告書, 16—17.
- 20) 同上 1986 b. 不本意入学と準拠集団 第23回全国大学保健管理研究集会報告書, 111—113.
- 21) 同上 1986 c. 準拠集団と認知 *メディカル・ヒューマニティ* 1(3), 98—103.
- 22) 豊嶋秋彦・芳野晴男・清 俊夫 1983. 大学新入生における適応状況と適応過程(V)—入試制度改定後における7月から2月に至る適応過程の予測因 弘前大学保健管理概要 7, 1—41.
- 23) 豊嶋秋彦・清 俊夫・芳野晴男 1984. 大学生の適応構造に関する長期的追跡研究—入学時・教養部終了時・4年時における人格適応の構造 弘前大学保健管理概要 8(1), 1—45.
- 24) 豊嶋秋彦・芳野晴男・清 俊夫・細川 徹 1985 a. 大学新入生の人格適応の変遷と大学教育・学生相談の課題: 社会心理学的接近 弘前大学保健管理概要 8(2)・9合併号 1—25.
- 25) 同上 1985 b. 大学生の適応過程に関する総合的検討(2)—1年次終了時点における適応感の関連要因— 東北心理学研究 35, 88—89.
- 26) 同上 1987. 大学生における適応の構造と適応過程の予測因に関する追跡的研究(昭和61年度科学研究費補助金研究成果報告書).
- 27) 土川隆史 1979. 不本意入学をめぐる問題 第12回全国学生相談研究会議・学生相談京都シンポジウム報告書 京都大学, 29—32.

正 誤 表

	頁 ; 行	誤	正
豊 嶋 論文	p.10 ; 13 p.14 ; 10 最終行 p.15 ; 10 p.17 ; 7 ; 26 p.18 ; 17	理系教官の <u>準拠</u> 結果をそれを半面で 公的な社会 <u>通念</u> 社会（文化）の <u>非適応感</u> そのための知識普及 不協和が <u>下</u> 不 <u>得意感</u>	<u>への</u> は 適 <u>応</u> <u>への</u> 吸 <u>収</u> <u>感</u> 本
清 論文	p.25 ; 16 p.38 ; 13 p.43 文献No5	自由記述式項目 <u>後者</u> について <u>SA・B（中間水準）改善</u> — <u>Yshino, H.</u>	<u>後者</u> を削除 <u>SA・B（中間水準）の改善</u> — <u>Yoshino,</u>
業 務 報 告	p.64 表4-2 脚注 最終行	カ <u>テ</u> ゴリー	テ